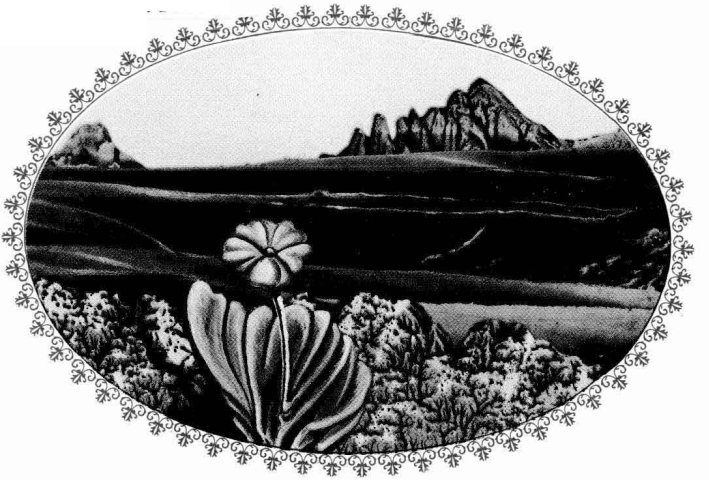
金星への旅

PERELANDRA

C・S・ルイス

中村妙子・訳

奇想天外社



金星への旅

PERELANDRA

C・S・ルイス　中村妙子・訳

奇想天外社

中村妙子（なかむらたえこ）翻訳家。津田塾大学講師。
1923年、東京生れ。東京大学文学部西洋史学科卒業。
主な訳書にC・S・ルイス著『愛はあまりにも若く』、『別世界にて』ラヴィン『砂の城』（みすず書房）、アガサ・クリスティー著『未完の肖像』、『火曜クラブ』（早川書房）他多数がある。

金星への旅

1979年2月25日第1刷発行

著者 C・S・ルイス
訳者 中村妙子
発行者 千頭俊吉
印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 奇想天外社
東京都新宿区赤城元町28番地
電話 (03) 268—8617. 268—8653
振替 東京 3—100293 郵便番号162

乱丁落丁本はお取かえします〈編集担当 近藤清美〉 ©1979

Voyage to Venus

(*Perelandra*)

by C. S. Lewis

装画　山田維史

A・D　小松桂士朗

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

金星への旅（ベレランドラ）

この物語は独立したものとして読むことができるが、〈沈黙の惑星を離れて〉の続篇でもある。〈沈黙の惑星を離れて〉には、火星――そこの住民によればマラカンドラ――におけるランサムの冒険の次第が述べられている。本書中に出てくる登場人物はことごとく架空の人物であり、アレゴリカルな含みはまったくない。

C・S・L

1

ウーチェスターの駅を後にランサムの家を目ざして三マイルの道のりを歩きだしたとき、ぼくはしきりに考えていた。あのプラットフォームにいた人々のうち、ぼくがこれからどんな男を訪ねようとしているか、推測できる者は一人もいないだろうと。ぼくの前にひろがっている平坦なヒースの野は（村は駅の背後の、ずっと北方にあった）、どくあたりまえの野に見えた。午後五時の陰鬱な空模様にしても、秋の昼さがりには珍しくもないもので、近くに見える数軒の家や、赤や黄色の葉をつけた木立にしても、とくにどうということのない風景であった。この静かなたたずまいの中をほんの少し行ったところに、かつてロンドンから四千万マイル隔った別世界に旅したことのある男がいるのだということを誰が想像しよう？　そのような別世界で飲み食いし、この地球があるかなきかのかすかな緑の炎としか見えぬ彼方からそれを見透かした男、いや、このわれわれの住む地球という惑星が人間の住むに堪える場所となる、ずっと以前に生れた存在と、したしく顔と顔を合せて話をしたことのある男に、ぼくがこれから会い、握手することになるのだとは、何人にとってもおよそ想像のほかだったろう。

じっさいランサムは火星で、火星人ばかりでなく、もっとさまざまなものを見たのだ。彼はそこでエルディラのうちでも、とくに火星を支配する偉大なエルディル、彼らのいわゆるマラカンドラのオヤルサと会ったのだ。エルディラ（種としてのエルディル）は、およそ惑星に住むいかなる生きものとも異っている。その体の組織は――仮りにそんな語が彼らにあてはまるものとしてだが――人間のそれとも、火星人のそれともまったく違う。エルディラは飲食も、繁殖もせず、呼吸することなく、自然的死をとげることもない。その点、われわれ人間が動物と呼ぶ生きものと異る。むしろ、〝考える鉱物〟という方が真実により近いかも知れない。エルディラはさまざまな惑星上に姿を現わし、おりにふれてそこに定住するかのような印象をあたえるかも知れないが、一定の瞬間におけるあるエルディルの正確な所在は、すこぶる問題である。彼ら自身は、宇宙空間（すなわち〈深い天界〉）を自分たちの真の住地と見なしている。惑星は彼

らにとっては閉ざされた世界ではなく、われわれが太陽系と呼び、彼らが〈アルボルの野〉と呼ぶものに内在する動的ないくつかの点――おそらく彼らの目から見れば障碍物でさえある――に過ぎないのである。

さてぼくは、「キュウヨウアリ、モクヨウユキテクレヌカ」という電報に答えて、ランサムを訪ねようとしていたのだ。急用とはどんなたぐいのものか、およその見当はついていた。だからこそ、ランサムと一夜を過すのはさぞ愉快だろうと思おうとつとめながらも、そのじつ、あまり愉快とはいえない気持をもてあましていたのだった。ぼくを落ちつかない気持にしていたのはエルディラであった。ランサムがかつて火星に行ったという事実については、およそのことは理解できるし、受けいれられもする。しかし彼がそこで特定のエルディルに会ったということ、あまつさえ、無限の生命力をもっているらしいその存在と話しあったというのは、どうもぞっとしない。だいたい、火星への旅だけでも薄気味がわるいのである。別世界に行ったことのある者が、以前とまったく同じ人間としてそこからもどるわけはない。どんな点が違うか、と訊かれてもうまくいえないが。その当の男が自分自身の友人だという場合、会うのは苦痛でさえ、あるかも知れない。昔ながらの親密な間柄に帰ることは容易ではないだろう。しかし、それにもましてぼくを悩ましていたのは、火星から帰って後も、エルディラがランサムにあいかわらずつきまとっているのではないか、いや、たしかにそうだとますます思えてならないことであった。ランサムの話のちょっとしたふしぶし、癖、いいかた、うっかりした述懐、何かいいかけて、はっとして、きまりわるげに弁解する様子など、すべてが暗示していたのだ――ランサムが今なお奇妙な手合いと交渉をもっていること、これからぼくの行こうとしている家に何とも知れぬ――〝客〟がいることを。

ウーチェスター公有地（コモン）の真中を走っている、両側に柵もない殺風景な道をとぼとぼと歩きながら、ぼくは心中のこうした抑えがたい不安（マレーズ）さを自分なりに分析することによってそれを何とか追い払おうと努力した。けっきょくのところ、ぼくはいったい何を恐れているのだろう？そう自問したとたんに、早くも後悔していた。〝恐れている〟という言葉を心の中だけにしろ、使ったことに、われながらショックを感じたのだ。それまでぼくはつと

めて、自分の感じているのは単なる不快感、もしくは困惑だ、いや、事の次第にうんざりしているだけのことだというふりをしてきた。けれども恐れているという言葉が、ぼくのほんとうの気持を曝露した。ぼくの感じているのはまさに〝恐怖〟、そう、掛け値なしの恐怖であった。こう気づくと同時に、ぼくは自分が二つのものを恐れていることを悟った――一つは、晩かれ早かれ、ぼく自身、エルディルに会うかも知れないということ、またもう一つは、自分も〝引きいれられ〟てしまうんじゃないかということだった。〝引きいれられる〟かも知れないというこの恐怖――それを知らない人は、いないだろう。それまで単なる思弁と思われてきたものがいささか様相を変え、このままではこの自分も共産党員に、――あるいはどこかの教会員に――なりかねないぞとはっとさせられる瞬間のことを――ドアが後ろでガチャンと音を立てて閉まり、とうとう内部の人間となってしまったことを悟る瞬間を。じっさいのところ、何もかも不運なめぐりあわせに過ぎないとぼくは思っていた。ランサム自身が火星（マラカンドラ）に行ったのだって、彼自身の意志に反して――というより、ほとんどまったく偶然だったのだし、ぼくにしたって、やはり偶然によってランサムの問題に関わることになってしまったのだ。それだのにぼくらは二人とも、現にこうして、惑星間の政治紛争としか呼びようがないものに、いよいよ抜きさしならず巻きこまれているではないか。さて、エルディラなどという手合いとはぜったいに関わりたくないというぼくの気持を、読者に理解してもらえるかどうか。それは単に種において異る、また、きわめて大きな力をもつ、知的な生きものを避けたいという用心ぶかさ以上のものだった。じつをいうと、これまでエルディラについて聞いたことからして、ふつう、人間の精神がはっきり分けて考える二つのものが一つに結びつくようになっている――それがショックだったのである。知性をもった、人間以外の生きものについては、人はは っきり二つの範疇を立てる。一つは〝科学的〟、もう一つは〝超自然的〟という範疇である。われわれはウェルズ氏（H・G・ウェルズ〔一八六六―一九四六〕）の火星人（ついでながら現実のマラカンドラの住人とは似ても似つかない）や月人（セレナイツ）についてはある気持をもち、天使、幽霊、妖精といった存在の可能性については、これとはまったく異った気持であれこれ考える。し

かし、どちらの範疇に属するものにしろ、ひとたびそれを現実の存在として認めることを余儀なくされた瞬間、両者の区別は不分明となりはじめる。しかもそれがエルディルのような存在だということになると、科学的、超自然的の区別はまったく消滅してしまう。エルディルは動物ではない――その点、第二の――〝超自然的〟範疇にいれて然るべきだろう。しかし彼らはまた、科学的に確かめうる(少なくとも原理的には)ある種の物質的媒質を備えている。その点、〝科学的〟範疇に属する。つまり自然的、および超自然的という区別が、事実上崩壊してしまうわけだ。そうなって、はじめてわかるのだが、人間がこの宇宙を科学的と超自然的の二つに分けて、両者を同じ文脈において考えないようにしてきたのは何とありがたいことだったか。宇宙がわれわれに必然的に課している、いいがたい不可思議の感――それはこの取りきめによって大いに軽減されているのである。ありがたいとはいったが、人間はまたこれによって虚偽の安心感に安住し、思考の混乱を敢えて受けいれている。その代価はずいぶんと高いものであるかも知れないが、それはまた別問題である。

「殺風景な道がいつまでも続くな。手荷物がなくてさいわいだ」さて、ぼくはこう呟いて、とたんにはっとした。身のまわりのものを一包みにして持ってきたはずだのに。しまった！　うっかり列車の中に置き忘れてきたに違いない。呆れたことに、ぼくはそのとき、すぐさま駅に取って返して〝何とか手を打たなければ〟という衝動に駆られた。もちろん、駅にもどったところで、ランサムの家から駅に電話をかけるのと結果的には大した違いはない。ぼくの荷物を乗せた列車はどうせ、すでに数マイルの彼方を走っているにきまっているのだから。

いま考えてみれば、むろんそんなことはわかりきっている。しかしその瞬間は駅に引返すことは当然しごくのように思われ、じっさい踵を返しかけたのだが、理性だか、良心だか知らないが、ともかくも何かが目覚めてようやく思いなおし、ふたたびとぼとぼと歩きだしたのである。しかし歩きながらそれまでよりいっそうはっきりと、自分がどんなに先に進みたくないと思っているかを自覚していた。進むことは事実、たいへんな努力を要したので、まるで強風に逆らって歩いているような感じだった。だがじつは強風どころか、小枝一つ動かぬ死んだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ように静かな夜で、あたりには霧さえ少々立ちこめだしていた。

進めば進むほど、エルディラのことばかりが頭にちらつき、ほかのことなど、まるで考えることができなくなってしまった。結局のところ、ランサムは彼らについて何を知っているのだ？　ランサム自身のいうところによれば、彼が火星で会ったたぐいのエルディラは、ふつうは地球を訪れることがない――訪れるようになったのは、彼が火星から帰還して後のことだろう。地球固有のエルディラもいるにはいるが、他の惑星のそれとは違う種類のもので、たいていは人間に敵意をいだいているらしい。じっさい、それだからわれわれの世界は他の惑星との交通を遮断されているのだとランサムはいった。いわばわれわれ地球の人間は敵に包囲されている町、敵の占領下にある領土に日を送っているわけだ。敵とは、一方ではわれわれ人間に、また他方ではあの〈深い天界〉――すなわち〝宇宙空間〟のエルディラに敵対しているエルディラたちのことである。ミクロの世界のバクテリアのように、マクロの世界におけるこの寄生虫どもは目にこそ見えないが、われわれ人間の生活の全域に人知れずはいりこんでいる。人間の歴史はしばしば致命的に歪んでいるが、それはじつは地球への彼らの寄生によって説明されるのである。とすればもちろん、われわれはよい種類のエルディラがついに国境を突破して（月の軌道にはいり）、地球のわれわれの所にこようとしている事実を歓迎して然るべきだということになる。もちろんこうしたことにしても、ランサムのいうところが真実を伝えていると仮定してはじめて成り立つ議論ではあるが。

ふと、いやなことを思いついた。ひょっとしたらランサム自身も欺されているのかも知れない。そうでないという証拠は何一つないではないか？　もしも宇宙に棲む何ものかが今まさにわれわれの惑星を侵略しようとしているとすれば、このランサムの物語以上の煙幕はないだろう。結局のところ、この地球上によこしまなエルディラが存在するという証拠が少しでもあるだろうか？　ランサムが知らずして一種の架け橋となり、あのトロイアの木馬の役割をつとめているのだったら？　つまり彼を通じて、他の惑星からの侵略者が地球（アルス）に上陸を敢行しようとしているとしたらどうだ？　そう思ったとたん、さっき、手荷物を列車内に置き忘れたことに気づいたとき

と同じく、これ以上進むのはやめようという衝動がふたたび胸につきあげた。「引返せ。早く引返すんだ」とその声はぼくの耳に囁いた。「ランサムに電報を打ち、病気だとでも、また日をあらためて行くとでも――いって断るんだ」その感情の激しさにぼくは驚いた。そして、ばかなことは考えるなと自分にいい聞かせつつ、なおしばらくそこに立っていた。ふたたび歩きだしながら、これはいわゆる神経衰弱の前ぶれではないかと思った。そう考えると、それがまた、訪問を中止するあたらしい理由となった。ランサムの電報が暗示しているらしい〝とんでもない〟用向きに、ぼくが適任でないということはたしかだ。こんなに心を乱している状態では、平凡な週末旅行さえ、できるかどうか。ぼくにとって唯一の分別ある行動は即刻、回れ右をすること、記憶喪失症になったり、ヒステリカルになったりする前に帰宅して、医師の手に身を委ねることではないだろうか？　このまま歩きつづけるなんて、狂気の沙汰だ。

こんなことを考えているうちに、ぼくはヒースの野の果てに辿りつき、左手に雑木林を、右手に工場の廃墟か何からしい建物を控えた低い丘を下っていた。丘の麓では夕靄が視界の一部を厚く閉ざしていた。「〝神経衰弱です〟――初期の段階では医者はそういうだろうな」とぼくは呟いた。ごくありきたりのものが、信じられないほど薄気味わるく見える神経症の症状があったような気がする……ちょうどいまこの工場の廃墟がいかにも奇怪なものとしてぼくの目に映っているように。巨大な、ごつごつしたセメントの塊り。煉瓦作りの奇異な建物。それは、よどんだ灰色の水たまりがやたらにあり、軽便鉄道の古い線路が所どころに残っているひねこびた枯野の向うから、ぼくを睥睨しているようだった。ぼくは別世界でランサムが見たというものについて思いだした。もっともそこで彼が見たのは建物などではなく、生命のかよう生きもの、ランサム自身がソーンと呼ぶ、手足のやたらひょろ長い巨人だったのだが。（訳者あとがき参照）いっそう薄気味が悪かったのは、ランサムがソーンをいいやつ――じっさい、われわれ人間よりずっと気のいい種族だと考えていることだった。そういった妙な生きものと彼は現に手を組んでいるのだ！　欺されているどころか、彼自身、たちの悪い人非人でないとどうしていえるだろう……こう思ったとき、ぼくはまたはっとして立止った。

読者よ、あなたがたはランサムを知らない。だからこんな考えがいかに理性に反しているか、理解できないだろう。ぼくのうちの理性的な部分は、その瞬間ですら、知っていたのだ。たとい全宇宙が発狂して人間に敵意をいだこうとも、ランサムは正気であり、健全な、正直な人間であることを。そしてぼくのうちのこの部分が、結局はぼくを促して前進させたのであった——不本意ながら、とぼとぼと。曲りなりにも前進できたのは、一歩ごとに無二の親友のいる所に近づいているということをぼくのうちに深く根ざす知識として知っていたからだった。しかし一方、ぼくの感情的な部分は、逆に、自分が一歩ごとに不倶戴天の敵——裏切者、魔法使い、〝敵の奴ら〟と手を組んでいる悪者——に近づいているということを知っていた。そうと知りつつ、馬鹿面をして陥穽に向って歩きつづけている自分を意識していたのだ。「まず神経衰弱と診断され」と心の中の声は囁いた。「保養所に送られ、ついには精神病院にほうりこまれるのが落ちだぞ」と。

さてぼくは死んだように静まりかえっている工場の脇を過ぎて、霧の中にはいった。寒さがひどく身にしみた。つぎの瞬間、何ともいえぬ恐怖——最初の圧倒的な——に襲われ、ぼくは悲鳴をあげぬよう、唇をぎゅっと噛まねばならなかった。一匹の猫が目の前をぱっと横ぎったに過ぎなかったのだが、ぼくはまったく意気地なく慌てていた。「そらそら、このつぎはほんとうに叫びだすよ」と胸の奥の意地悪い声がいった。「ぐるぐるきりなく走りまわって、泣きわめくようになるぞ」

道端に小さな空き家があった。窓の多くには板が打ちつけられていたが、一つの窓はガラスが割れたままで、死魚の目のように冷ややかにこっちを睨んでいた。ふつう、幽霊屋敷はぼくにとっても読者のあなたがたにとっても同様、とくに際だった意味をもっているわけではない。もちろん、何の意味ももっていないといえば嘘になるが。しかしその瞬間、ぼくの胸に浮んだのは、幽霊そのものの恐ろしさではなかった。〝幽霊屋敷〟とか——〝幽霊が出る〟、〝幽霊にとりつかれている〟……という表現……短い言葉の中に何と独特なものがこもっていることか！　そうした言葉を以前聞いたことのない、その意味をまったく知らない子どもですら、日暮に大人が「この家には幽霊が出るそうだよ」と囁きあうのを聞く

とき、身を震わせはしないだろうか？

そんなことを考えているうちに、ウェズレー派のちいさな教会堂の脇の四つ辻にさしかかった。たしか、ここのぶなの木立の所で左に折れるはずだ。ランサムの家の明りがもうそろそろ見えてもいいころだがとぼくは思った——それともすでに燈火管制の時間にはいっているのだろうか？　時計が止ってしまったので、時刻はわからなかった。かなり暗かったが、霧と木立のせいかとも思われた。ぼくが暗闇を恐れていたわけではないということは、わかってもらいたい。生命のないものが、ときとして何か人間に似た表情をもっているような気がすることがあるのは誰しもしばしば経験するところである。そっとしなかったのは、今歩いているその道の表情であった。「〝ほんとうに発狂しかけている人は自分ではけっしてそうは思わない〟とよくいわれるが、自覚しつつ発狂することだってあるさ」とぼくの心の声は呟いていた。本物の狂気が、いまのいま、ぼくのうちにきざしはじめたのだとしたら？　とすればもちろん、敵意をくすぶらせつつ、ぽとぽとと不景気に雫を落しているこの立木は——何かを待ち構えているようなこの陰険さは——幻覚に過ぎないにきまっている。が、そう思ったからといって気持がらくになるわけではない。目のあたりに見た幽霊を幻だと判断したところで、恐怖は消えはしない。発狂するのではないかという危惧がその上に加えられるだけのことである。そこへもってきて、他の人々が気違いと呼ぶ人間こそ、もしかしたら世界の実相をつねにさだかに見ている唯一の人間だったのではないかというもっと空恐ろしい推測も胸をよぎるとあっては、なおたまらない。

こうした恐怖が今やぼくを捉えていたのだ。これはどうやらほんとうに、〝狂気〟と呼ばれる域にはいりつつあるのではないか——半ばそんな弱気に駆られながら、寒さと暗黒の中をぼくはよろよろと歩きつづけた。だが正気についてのぼくの見解自体、刻々変化しつつあった。われわれが住むことを余儀なくされている宇宙のよそよそしさと悪意——それをわれわれの視界から遮ってきたものは単なる慣習に過ぎなかったのではないだろうか？　目に快い明滅燈、いわば馴れあいの希望的観測だったのかも？　ここ数カ月、ランサムに接してぼくが知るにいたったことは、すでに〝正気〟の受けいれる程度を超え

ていた。しかしぼくはそれらを非現実としてあっさりかたづけるには、あまりにも深いりしすぎていたのだ。ランサムの解釈やその信念を疑ったことはあっても、彼が火星で遭遇したもの――ブフィフルトリッギ、フロッサ、ソーン――惑星間を自由に往来するエルディラたち――の存在を疑うことはできなかった。エルディラたちがマレルディルと呼び、地球のいかなる独裁者も臣下に要求しえぬようなまったき服従をささげているらしい、あの神秘的な他者の実在すら、ぼくは疑わなかった。マレルディルを、ランサムがどう考えているか、知っていたからだ。

あそこに見えるのがランサムの家だろう。完璧な燈火管制下にあるらしい。ぼくの胸には、子どもらしい甘ったれた思いが突きあげていた。なぜ、ランサムは門口に出て、ぼくを迎えてくれないのだろうと。ついでいっそう子どもっぽい懸念が後を追うように湧いた。もしかしたら、ランサムは庭でぼくを待ち伏せしているのかも知れない。後ろからぼくに飛びかかってくるのでは？　それともランサムに似た姿が背をこっちに向けて立っているのを見て声をかけると、人間のものとも思えぬ顔が振向き……

当然のことだが、この局面については、ぼくはこれ以上くわしく話したいとは思わない。ぼくがそのとき、どんな精神状態だったか、それは今思いかえすと、穴があったらはいりたいような気がする。できれば書かずにすませたいが、しかし続いて起ったこと――それ以外のことをも少々含めて――を十分に理解するには、そのときのぼくの心理状態をいささか説明する必要がある。しかしいずれにせよ、どうやってランサムの家の戸口に辿りついたかを記述するのは、実際問題としてできない相談だった。ただ狼狽しきっておっかなびっくり、そればかりか、見えない壁が目の前に立ちふさがっているようで、一歩進むにもひどく骨が折れるようにさえ、感じたこと、生け垣から突き出ていた小枝が顔を撫でたときに思わず大声で叫びそうになったことを覚えているが、ともかくも何とか門からはいり、小路を進んだ。玄関のドアの前に立つとぼくはそれを乱打し、ハンドルをけたたましい音を立てて回して、まるで生死がかかっているかのように大声で呼んだ。

応答はなかった――ぼく自身の声と、ハンドルのガチ

ャガチャいう音のこだまのほか、何の物音もしなかった。ノッカーの上に何か白いものがひらひらしていた。もちろんランサムの書き置きだろう。マッチをすって読もうとしたが、手がぶるぶる震えているのに気づいた。火はなかなかうまくつかず、消えるつど、あたりの闇がいちだんと深まるのが意識された。マッチを何本か無駄使いしたすえに、ぼくはようやくその紙きれに書かれている伝言を読んだ。「失敬。ケンブリッジまで行く用ができた。遅い汽車で帰る。戸棚の中に食べものがある。ベッドはきみのいつもの部屋に用意した。ぼくを待たずに、食事をすましてくれたまえ。E・R」読み終るやいなや、ランサムもいない以上、即刻退散しようという、それまでにも何度か感じた衝動が、一種悪魔的な激しさでぼくを襲った。今なら帰れる。退路は開かれている――さあ、帰りたまえといわんばかりに。この好機を逸してなるものか。無人の家の中にのこのこはいって行き、五、六時間もひとりで坐って待っているなんて、とんでもない！　しかし帰りのことを本気で考えはじめるや否や、ぼくはためらった――この家を後にして（歩きだしたら家が追いかけてこないか、などとばかげたことまで考えた）あのぶなの並木道をふたたびてくてく歩いて（外はどうせもう、真暗だ）帰るなんて、どう考えてもありがたくない。そのとき、もう少し高潔だと思われる考えが浮んだ。いくらかまともな感情、この期におよんでランサムに肩すかしをくわすのは気が進まないという気持、少なくともドアにほんとうに鍵がかかっているのかどうか、ハンドルを回して押してみよう――そう思ったのだった。試みに押してみるとドアは――難なくあいた。次の瞬間、とにもかくにもぼくは家の中にはいり、ガチャンと大きな音を立ててドアを閉めていた。

中はずいぶん真暗で、ぼうっと暖かかった。手探りしながら二、三歩進むうち、何かにしたたかに向うずねをぶつけて、転んだ。数秒のあいだ、ぼくは痛い足をこすりこすり坐りこんでいた。ランサムのホール兼居間の模様はかなりよく心得ているつもりだったが、いったい何にぶつかったんだろうとふしぎだった。しばらくして、ぼくはポケットからマッチを出して、すってみようとした。しかしマッチの頭がちぎれて飛び、ぼくはそいつを念のために踏みつけながら、絨毯の上でくすぶっていないかどうかと空気のにおいを嗅いでみた。そしてそのと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c